

新語の生成と意味変容について

—「地球にやさしい」、「環境にやさしい」のやさしいとは何か—

平 林 あゆ子

はじめに

私たちは、新しい観念、新しい事物や対象に遭遇する時、それらの名づけが必要となる。このことに対し、私たちはまったく新しい語形を作り出したり、既存の語⁽¹⁾や、その組み合わせ⁽²⁾を新しい意味で用いたり、外国語を意識して新語をつくったり⁽³⁾、外国語の音訳⁽⁴⁾や翻訳借用 (loan translation)⁽⁵⁾により、対処している。本稿において、このような方法による造語を新語と呼ぶ。

本稿の目的は、新聞というメディアにおける用例を手がかりとして、翻訳借用による造語「地球にやさしい、環境にやさしい」の意味、用法が、言語共同体において安定するまでの変容過程を明らかにすることにある。

新聞を研究材料に使用する理由は、それが広範な読者層を対象とするメディアであり、私たちの社会の中であって代表的標本として研究材料にふさわしいからである。新聞が文字媒体であることにより、手軽に資料化できること、時間的経過を見るのに都合が良い。また新聞は、毎日発行されているので、語の用法の変化を文字形式で最も敏感に反映する。そして新聞記事の中で、意味が一般によく知られていない新語が使用される時、その意味は文脈において何らかの言い替えにより説明される。つまり新聞は私たちの言語共同体の中であって、新語の意味、用法を反映する鏡として有効に機能し、当該課題の探究にとって、貴重な資料を提供するのである。本稿では『環境白書』、『現代用語の基礎知識』(以下『基礎知識』と記す)に収録されており、環境問題の深刻化に伴って導入された翻訳借用による翻訳語「地球にやさしい」、「環境にやさしい」をとりあげる。

「環境にやさしい」は、ドイツ語の“umweltfreundlich”の翻訳借用による翻訳語である。1989年、環境庁の委託を受けて、日本環境協会において設立した基本方策策定委員会で、環境問題への取組では先進国たるドイツにおける環境保護の方法を調査した。その際に日本のエコマークの制度の導入について検討し、ドイツのエコラベルのロゴ“umweltfreundlich”を翻訳した「環境にやさしい」の環境を地球に換えて、「地球にやさしい」を日本のエコマークのロゴとした、という⁽⁶⁾。

なお“umweltfreundlich”は(Umwelt: environment)と(freundlich: friendly)の複合語にあたり、ドゥーデン出版社の一連の辞典では、DER GROßE DUDEN BAND 1 (1973)に初出している。そして1978年西ドイツにおいて、世界最初のエコマーク(環境保全に役立つ商品に表示されるラベル)が制定され、そのロゴとして今日に至るまで使用されている。

この新しく導入された「環境にやさしい」をとりあげることにより、日本語として古くから使用されている「やさしい」の用法とは異なる「やさしい」を観察することができよう。これにより、語の意味、用法の変容のあり方を明確にするための一つの手がかりを得ることができると思われる。この新語について、一般紙であり、データベースにおいて最も古く遡ることができる『朝日新聞』(1985—94年、以後『朝日』と記す)を資料として、この新語使用の記事件数を、統計的に提示する。そして、この新語が使用されている記事の用例を手がかりとし、調査対象期間における初出から定着の過程における用法や、提示の際の説明内容にみられる言い替えをいくつかの点から検討し考察する。

1 「地球にやさしい、環境にやさしい」の一般化について

「地球にやさしい」は、アメリカのベストセラーの翻訳で、題名に『地球にやさしい生活術』(TBSブリタニカ、1990年)で用いられたのを始めとして、90年台初期の出版界では、『地球にやさしい……』という題名の氾濫の兆しが見られる。『環境白書』においては、総説、各論とも平成2年版(1990.5)からこの語句の使用が認められる。また、『基礎知識』の「日本新語・流行語大賞」(84年開始)の表現部門において、92年銀賞を受賞したことは、社会に普及し、当意即妙なる表現として一定の評価を得たことばであることを示すものである。

また、「地球にやさしい」、および「環境にやさしい」が使用されている記事の総件数は、『朝日』(1985—94年)において343件で、初出は89年12月2日である(85—88年は無し)。同表現の各年別記事件数を、初出の89年から図1に示す。これにより、二つの新語は91年から記事に頻繁に使用されていることが分かる。特に「地球にやさしい」は、九一年から急激に記事件数の増加をみている。これは、89年3月末に開始されたエコマークのテーマである「地球にやさしい」の影響である。

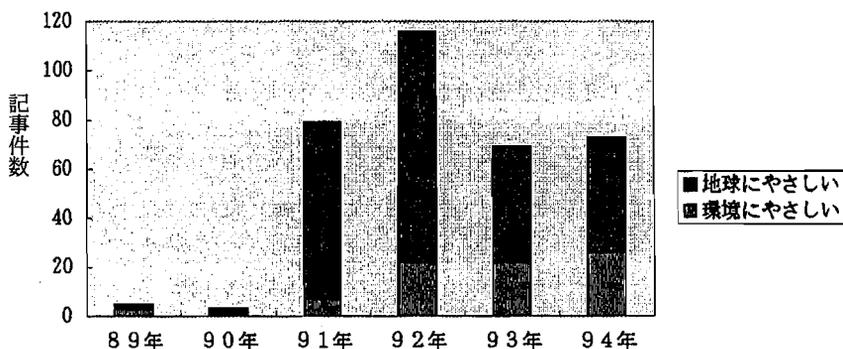


図1 年別記事件数

『基礎知識』(1948—95)では、92年版において「92年の最新語」の項で「環境にやさしい文化」の記述がみられる。これは環境庁に設けられていた「環境と文化に関する懇談会」が提唱した考え方で、環境問題の解決に対して技術ばかりでなく、人間の側の変化を促す必要性があるという考えからきている。

「地球にやさしい」、「環境にやさしい」はいずれもエコマークに伴って出現したことばであり、出版物の題名、官庁の提言など相互に影響しあいながら登場し定着してきたことばである。

2 「環境にやさしい」の意味用法について

まだよく知られていない語が記事の中で使用される時、何らかの方法で言い替えが付与される。ここでは「環境にやさしい」を例に、その言い替えを時系列にしたがって観察することにより、私たちの言語共同体における新語の意味

規定の様相を捉えることを試みる。

2. 1. 「環境にやさしい」の言い替えについて

「環境にやさしい」の文脈の中における言い替えは、初出89年から91年には全ての記事において見られる。92年はこの年の全記事数22件の内17件の記事に、93年は全記事数22件の内16件に、94年は全記事数26件の内17件の記事にそれぞれ言い替えが見られる。言い替えを伴わずに提示される記事は92年から94年までを合計すると、約3分の1である。その言い替えは、具体的例示を伴う説明であったり、単なる別の語句であったりする。記事の中で「環境にやさしい」が、どのような単語や句に言い替えられているかを、言い替え例として記事1（部分記事、下線部は「環境にやさしい」の言い替えを示す）と表1で示す。

記事1 （92年10月7日）

環境庁の委託を受けて地球・人間環境フォーラム（岡崎洋理事長）が策定作業を続けていた「環境にやさしい企業行動指針」の内容が七日、固まった。企業に対して、環境に配慮した経営方針や行動計画の策定、事業活動に伴う環境影響評価（アセスメント）や環境監査の実施を提案している。

記事1において「環境にやさしい」は、「環境に配慮した」と言い替えられており、配慮の内容として環境影響評価や環境監査の実施により、「想定されるいろいろな場合に対する対処の方法を考えて何かをすること」⁽⁷⁾、つまり「環境を汚染しない心くばり」を指して使用されている。このような言い替える語句を、時系列上追ってまとめたものが、次の表1である。

表1 単語や句による「環境にやさしい」の言い替え(言い替えが具体的例示を含んだ説明文は除く)

年	言い替え語句
89年	「環境保護」2件
92年	「自然の理にかなった」、「環境によりよい」、「環境に配慮した」2件、「環境保全」、「地球環境を考える」、「環境を守る」、「地球環境の保全」、「地球環境保全を念頭に置いた」、「省エネ」

93年	「自然保護」, 「殺虫剤に頼らず退治する」, 「化学肥料や農薬などを使わない」, 「エネルギーを十数パーセント節約する」, 「環境に配慮する」, 「資源や環境への気づかい」, 「ゆとりと豊かさが実感できる」, 「エコ」
94年	「リサイクルに力を入れている」, 「リサイクルで生まれた」, 「減税」, 「景気対策」, 「エコ」, 「減農薬や無農薬の」, 「廃棄物を積極的に再利用する」, 「リサイクル」, 「リサイクル活動を中心にした」, 「住みよさや豊かさ」, 「環境に配慮した」, 「生態系を保全したり, せんていした街路樹の枝を再生利用する」, 「料理のゴミを減らす」, 「フロン規制に対応した」

エコマークの紹介記事(87年11月18日)においては『環境を汚さない商品です——という「お墨付き」』という表現が使われていたが、「環境にやさしい」の初出記事においては、「環境にやさしい商品」と言い替えて登場した。すなわち「環境にやさしい」は環境を汚さないという意味で使用され始めた。単語や句による言い替えは、固定した言い替えはなく、「環境にやさしい」を含む記事が頻繁に出てくるに従って、「環境を汚染しない」のみならず、「環境保護、自然の理にかなった、環境に配慮した、資源や環境への気づかいのある、生態系を保全した」のように、より広い意味範囲で言い替えられていることが分かる。また、「環境」はどの範囲の対象を示しているのか明確ではない。「環境」は自然そのものでなく、人為的に手を加えられ刻々と変化していくものであり、このことも「やさしい」の意味用法を多様化している。しかし概して「環境にやさしい」の「やさしい」は「汚染しない、リサイクルで調和をとる、気づかいのある」など環境に「害を出さない」という意味で使用されている。「環境にやさしい」の具体的な意味内容は、文脈における具体的な言い替え的説明なしには理解が難しい。そして新語の意味は提示される文脈の中で形成されていくことが観察される。

次に「環境にやさしい——」の棒線部(主体)にどのような語彙項目をとるのかについて調査し、それが「やさしい」の意味規定にどの様に影響するか検討する。

2. 2. 「環境にやさしい」の主体について

「環境にやさしい」の主体は、当初、主に商品、具体物であったが、抽象的概念を多くとるようになる。初出は（89年12月2日）において、エコマークの紹介の記事の中に、「環境にやさしい商品」と、具体物（粉せっけん）が用いられている。「環境にやさしい」の出現初期の頃は、初出の記事と同様に、主体は商品、具体物が使用されていたが、91年に入り次第に抽象的概念がその主体となってきている。主体となっている語をいくつか例示すると、環境にやさしい「企業行動」、「交通運輸」、「オリンピック」（記事2により例示）、「研究所」、「建設」など、意外なものが「やさしい」の主体として用いられていることが分かる。なお次に挙げる「主体」にどんな語句が用いられているかの調査結果「表2」を挙げる。これらの主体は、抽象的概念に拡大使用されており、全て無生物で、人のくらしを囲む人為的事物である。表2や記事2に例示した主体がとる語彙項目は、環境を汚染する可能性のあるあらゆる事物をとることが可能である。そのことが「環境にやさしい——」の「やさしい」の意味範囲を拡張し、具体的説明による意味の限定がないと、その理解は困難である。

表2 関連記事に使用されている「環境にやさしい」の主体
（環境を汚染する可能性のある顕著な主体を〔 〕内に掲げる。）

91年	環境にやさしい—〔企業行動，交通運輸，経済社会〕
92年	環境にやさしい—〔商品，産業設計，自動車〕
93年	環境にやさしい—〔研究所，自動車利用運動，木炭，都市，オリンピック，五輪，交通体系〕
94年	環境にやさしい—〔農業，企業建設，建設工事，都市，冷蔵庫〕

記事2（93年12月11日）

リレハンメルの場合は「環境に優しいオリンピック」という路線を貫いてきたからだ。

例えば、ボブスレー、リュージュのコースの建設にあたって、組織委は多くの樹木を残して景観に配慮した。工事で業者が立ち木を余分に切ると、一本約八十万円という罰金も設定したほどだ。ジャンプ台の建設でも崩した岩をそのまま石積みに使った。草木一本、石一個まで大事にして、環境問題に細かく配慮した。

記事2の「環境にやさしい」の主体「オリンピック」にみられるように、主体は環境に被害を与える可能性がある。このような文脈では同表現がはじめに持っていた「環境を汚染しない、害を与えない」という意味が「環境を汚染したり破壊したりするにはするが、それを最小限にとどめる」という意味に使用されている。

3 “freundlich”, “friendly” と翻訳語「やさしい」について

3. 1. “umweltfreundlich”, “environmentally friendly” の「やさしい」と訳されている“freundlich”, “friendly” について

ドイツ語“freundlich”の基本義を豊富な記述のある「ドゥーデン・ドイツ語大辞典」⁽⁸⁾に探ると、“im Umgang mit anderen aufmerksam und entgegenkommend”（人とのつき合いでこまやか、かつ好意的な）の意味記述にみられるように、対人関係において「敵対しない、相手の意を重んじる」ということで、前提に上下の関係ではない友人に接するような思いやりの関係があるというのが“freundlich”と考えられる。

また、“umweltfreundlich”⁽⁹⁾の項には、die natürliche Umwelt nicht beeinträchtigend（自然環境を損なわない）の意味記述があり、用例に洗剤（Waschmittel）、包装（Verpackungen）、交通手段（Verkehrsmittel）などを修飾する語として記述されていて、「2. 2」の「環境にやさしい」の主体について検討したものと違わない。

英語においては、“environmentally friendly”と表現されており、最新の『ロングマン現代英英辞典』第3版（1995）において、“environmentally friendly”の項（第2版[1987]には無い）が見られ、“not harm the environment”（環境に害を与えない）とある。また、friendlyの項にも、用例として“environmentally friendly”があり、“not damaging to the environment”と言い替えて、“environmentally friendly washing powders”（環境に害を与えない粉末洗剤）という用例が登場する。これはさきのドイツ語の用例と同じであり、同様に扱っても良いと判断できる。以後英語の“environmentally friendly”を中心に論ずる。環境問題についての記述によく登場する“environmental”、“environmentally”という派生形も『ロングマン現代英英辞典』第2版（1987）には記載がなく、第3版（1995）に初めて付加さ

れたものである。この語句の用法の実際を知るために、英米出身の人々（大学教員（客員）2名（50歳前後、女性）、院生2名（20歳台後半、男女））へのインタビュー調査を行った。その結果、“environmentally friendly”が英語においても比較的新しい用法で、スプレーやシャンプー、特にリサイクル可能な車のパーツ、コンピュータなどの商品に記された馴染みのことばであるという。この語句は「環境に害を与えない」という意味で使われており、“friendly”を使用することで、環境と調和のとれたいい感じを出しているということであった。この環境と調和のとれたいい感じを与える“friendly”を商品に付帯させ、印象付ける意図が読みとれる。

また、“friendly”の持っている中心的意味をThe Oxford English Dictionary 2nd ed. (1989)で探ると、[Having the qualities or disposition of a friend, disposed to act as a friend, kind.]（友人のような特性、気質をもって、友人のような態度で、親切な）という記述がある。friendの項には、[One joined to another in mutual benevolence and intimacy]（相互の慈愛と親しさで結ばれている）とあり、通常、恋人や親属には使われないとある。すなわち「友人のように」とは、少なくとも傾斜のある位置関係にはなく、相互の関係にある慈愛の気持ちや態度が根底にあることばと考えられる。これらから、“environmentally friendly”は「人と環境は上下の関係にはない友人のように、敵対せず協調・共存関係にあるように」という含意がある。

3. 2. 「環境にやさしい」の「やさしい」について

「やさしい」の基本義を最新の『研究社新和英中辞典』第4版（1995）にあたると、「やさしい」に対する英語訳として（＜柔和な＞ gentle (-mannered), ＜愛情のある＞ tender affectionate, ＜親切な＞ kind kindly kind-hearted）がある。これはさきの調査にみられた“freundlich”, “friendly”の記述のような、対人関係において対等の関係を前提とする「敵対しない、調和のある」という記述とは、ややニュアンスを異にしている。また、この項の末尾には用例として、{自然[環境]にやさしい nature [environment]-friendly / ユーザーにやさしくない user-unfriendly ; user-hostile} の記述がみられる。これは、現在、英語において自然や環境に対して用いられる“friendly”の用法がかなり一般化してきていることの表れである。このことは、当該の用法における

“friendly”を、日本語で「やさしい」と翻訳することの一般化をも示している。最近よくみられる“user friendly computer”などにおける“friendly”の用法は、「敵対しない」、つまり緊張関係の無い友達のような気楽さを含意する「やさしい」の新しい用法と同じである。

また、一般によく使用される国語中辞典六冊⁽⁴⁰⁾により、後述するものを除いて全体を整理すると、「やさしい」には{①おとなしくて好感がもてる ②思いやりがあって親切だ ③優美だ}という三種の記述がみられる。該当する「やさしい」は、「②思いやりがあって親切だ」という配慮を含んだ記述が近いと考えられるが、この「思いやり」とは、主体が対象の立場に立って考えることである。

ここで、「……にやさしい——」の用法について、対人関係を示す用例を挙げてみると、「患者にやさしい看護婦」、「生徒にやさしい先生」、「社員にやさしい社長」、「障害者にやさしいまちの人々」などが考えられる。このことから、「……にやさしい——」は、主体(下線部)と対象(ゴシック部分)の関係に、何らかの優位にある者(主体)から何らかの恩恵を被る者(対象)に向かったの態度を表す用法がより一般的と考えられる。

しかし、翻訳語「環境にやさしい——」、「地球にやさしい——」の「……にやさしい——」のもとの語義は、友人という上下の関係にはない対等の関係にある他者への気持ちや態度を前提としており、日本語における主体から対象に向かったの傾斜をもつ「やさしい」とは基本となる前提が異なっている。

さらに、最新の国語大辞典⁽⁴¹⁾には、前述の三種の意味記述以外に「環境にやさしい」という用例はないが、語源や古い用法として(恥ずかしい、つつましか、けなげである)の意味記述がある。これは、「やさしい」がもともと、主体から他者に対して、恥ずかしいと感じられたり、つつましか、けなげだという思いを表すからである。つまり、この「やさしい」は『環境白書』平成6年版(総論)の記述にもみられる様に、「[瘦す]という古語を起源としていて、瘦せるほどに自省する人が初めて成し得る他者への思いやり」を指している。そして、「環境にやさしい」は、自らの行動が、その生存基盤である環境に大きな影響を与えていることへの深い自省を、意味しているのである。その「思いやり」を既述の和英辞典にみると、「同情」“sympathy”, “compassion”「察し」“thoughtfulness”, “consideration”という記述があり、他者に対す

る気持ちを表して、さきの「やさしい」の英訳 [gentle, tender] などとも異なり、相手に痛みがある場合の「同情、察し」となっている。

「……に思いやりのある ——」の用例は、対象（……）に人以外をとる例を作って、「……にやさしい ——」の用例と比較すると、違和感を生じる。「……に思いやりのある ——」の「思いやり」ということばは、より限定された意味範囲をいまだに保持していると考えられる。

例えば、次の用例「……にやさしい ——」（『朝日』による）の「やさしい」を「思いやりのある」に換えて、考察してみる。次の○は（表現としてとおる）、×は（違和感あり）を示す。

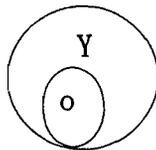
「皮膚にやさしい繊維素材」： 「肌にやさしい下着とパジャマ」：

「皮膚に思いやりのある繊維素材」× 「肌に思いやりのある下着とパジャマ」×

「赤ちゃんに思いやりのある繊維素材」○ 「赤ちゃんに思いやりのある下着とパジャマ」○

このように、「…にやさしい—」の「やさしい」を「思いやりのある」に換えてみると、「やさしい」をとる時より違和感を生じる。また「皮膚」や「肌」を「赤ちゃん」など人に換えると成立しやすくなる。

これは「思いやりのある」の語彙素性に、対象として人を選択する特徴があるということで、「やさしい」の語彙素性の方がより幅を持っているということである。つまり「やさしい」は「思いやりのある」より大きな意味範囲をもっていると考えられ、これを概略的に図で示すと、次のようになる。



Y=やさしい O=思いやりのある

そして、「……に思いやりのある ——」の主体、対象（……）とも人をとる用法は、例えば、「障害者に思いやりのあるまちの人々」、「生徒に思いやりのある先生」など、同様の用法が成立し、「やさしい」と「思いやりのある」は、根底となる関係の性質や他者への思いの質において類似していると考えられる。そして「やさしい」はより大きな意味範囲を持ち、「思いやりのある」

を包含していると考えられる。

「環境にやさしい」という用法の記述について、唯一の例外は、『岩波国語辞典』第五版(1994年)において、{《「……にやさしい」の形で、……の所が人以外のものを指す場合》荒れなど悪い作用のあとを生ぜず、品もいい。「お肌に—化粧品」「環境に—(=環境を汚染しない)洗剤」1980年代から使われだした意。}が付加されていることである。これは「……にやさしい」の……に、人以外のものをとる時の用法が定着してきていることを示している。その場合、「汚染しない、害を与えない」という意を含むことを示唆している。すなわち「……にやさしい」の……に人以外のものをとる時の新しい用法が認識されているのである。しかし、後に述べるように、……には人以外のものではあるが、それは人に属するもの、人の下位語となっているのである。

以上から「環境にやさしい」の「やさしい」は、もとのfriendlyの含意する友人という上下の関係にはない他者への気持ちや態度は前提とされていないが「害を与えない、敵対しない」という意味に使用されている。次に、私たちの言語共同体において「地球にやさしい」、「環境にやさしい」の一般の人々の新聞における投書にみられる用法、更に「……にやさしい」の「……」に、地球や環境以外のものをとる時の用例を検討してみたい。

4 投書にみられる「地球にやさしい」、「環境にやさしい」の用法

一般の人々の使用の実態をみるために、1985—95年に掲載された投書欄から、この新語が使用されている15件を収集することができた。「地球にやさしい」、「環境にやさしい」が初めて投書欄において使用されるのは91年12月である。投書欄に使用され始めたことは、一般の人々がそれぞれの言語世界の中にこの新語を取り入れ、抵抗感なく使用していることを意味し、この新語の私たちの社会においての一般化の指標とみることができる。また、この新語が環境問題についての意見の中で使用され、年齢層も20歳台から60歳台におよぶ様々な職業の人々の投書となっている。次に投書例として、記事3(部分記事)を示す。(なお引用にあたって、該当部分をゴシック体とした。)

記事3(「ひととき」欄) 93年12月30日

マイルド人間めざす (千葉県柏市 主婦・44歳)

やさしい気持ちが相手に自然に伝わることは素晴らしい。「地球にやさしい」という言葉がはやっているが、人にも、ものにも、やさしくすることがもっともっと浸透したなら、どんなにいい気分で毎日を暮らすことができるだろう。

紙幅の関係で一例に止めたが、どの例においても初めに、エコマークのロゴに用いられた「地球にやさしい」という句を使用し、後に「地球にやさしい— 一体型、一農業、一工夫、一企業努力、一暮らし」など、主体の箇所人が作り上げた抽象名詞をとっている。この抽象名詞のとり方は、「2. 2」で検討した結果と一致する。記事3では、この新語の「やさしい」は、投書のタイトルにある「マイルド」という意味あい、古くから使用の「やさしい」の意味を引きずって使用されていると考えられる。その他の投書においては、「地球環境に害を与えない」という意味あいで使用されており、「2. 1」の言い替えの調査結果と一致する。また、記事3の「地球にやさしい」という言葉が「はやっている」という使用や、95年末の投書（声欄）において、「[地球にやさしい暮らし]という表現を年頭に誓う」などもみられ、この新語が一般に普及していることが示唆される。記事3において「ものにやさしくする」という表現がみられるが、この発想はものを人のように扱い、みたてるといふ擬人化の視点から生まれたもので、「地球にやさしい」と同じ発想である。その影響から、このように違和感なく使用されているとみられる。

5. 「……にやさしい —」の用法について

従来、人と人との関係の中で使用されてきた「やさしい」が、「環境」や「地球」と共起する関係で新しく使用され始めた。この「……にやさしい —」の主体や対象（地球や環境以外）について、「やさしい」の用法を検討する。

『朝日』（1985—94年）の記事において、「……にやさしい —」（……は対象、— は主体で無生物）の、……が「環境」や「地球」以外の用法を検索すると、90年以前はこの「……にやさしい —」は検索できず、90年以降、……が「環境」や「地球」以外の語彙をとる用法が出現しはじめ、時間の経過とともに次第に増加している。「……にやさしい —」の用法は、対象が地球や環境ばかりでなく「胃、人、車いす、ストレス、髪、赤ちゃん、女性、皮

膚, 肌, 身体, 障害者や高齢者, お年寄り, サラリーマン, 老後の体, 外国人」などにもおよんできている。これらの語は, 全て人間に関わる意味分野に属する語である。意味特徴を例示すると, 人間の総称としての「人」や, 年齢による「高齢者, お年寄り, 赤ちゃん, 」, 性による「女性」, 人間の「身体」とそれに属す部分「皮膚, 肌, 髪, 胃」などであり, 包摂関係の語群である。また, 人間の総称「人」の下位語としては, 「車いす (使用者), 外国人」などを含め, 全て「配慮の必要」を意味特徴としている。

例として「対象」に人をとる部分記事を挙げる。(なお括弧内にその言い替えを示す)

(92年12月22日) 「赤ちゃんにやさしい病院 (母乳育児を広め乳児死亡率を下げる)」は, WHO (世界保健機関) が認定した聖マリア病院についての記事

(94年11月29日) 「人にやさしい住まいづくり体験館 (高齢者の生活に配慮した住宅モデルを展示する)」横浜市に開館予定の記事で, ここでいう「人」とは高齢者のことである。

次に「対象」に, 人以外をとる部分記事を挙げてみる。

(90年2月11日) (やさしいの対象に, 人以外をとる記事の初出) 「胃にやさしいCDブック (ストレスによる胃痛をリラックスさせる効果がある)」製薬会社が音楽でストレスによる胃痛を和らげるためのCDを作ったという記事

(94年6月28日) 「老後の体にやさしい住宅 (段差のない床, 手すり, 低い調理台などの配慮がある)」高齢者, 障害者のために, 自治体・企業の住宅モデルルーム造りの記事

このように, これらを対象とする時の「やさしい」は「2」の調査でみたような環境を対象とする時の「敵対しない, 害を与えない」という意味というよりも, 日本語のもつ他者への思いやりという意味を残しつつ使用されている場合が多い。検索した各記事を詳細に検討すると, 対象はいたわられるべき存在であり, 決して優位にあるものではないことが分かる。このことから, 「地球にやさしい」「環境にやさしい」は, 地球や環境も人がいたわるべき存在であ

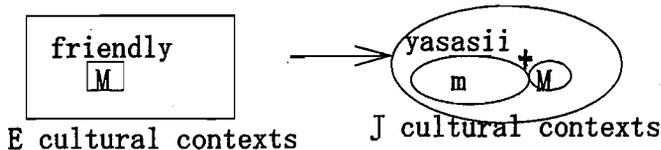
り、決して対等の関係でなく、人が優位にたつ関係を含意していると結論づけられる。また、検索したこれら全ての語句は人を注目させる意図をもっており、ほとんど企業や官公庁からのもので、この「やさしい」の新しい用法は、経済や政策によって牽引されていると考えられる。

6. まとめと考察

新語が誕生していく過程には、外来の概念を既存のことばにおきかえる造語の仕方、すなわち「地球にやさしい」、「環境にやさしい」のような翻訳借用の現象が見られる。本稿では、新聞というメディアにおける用例を手がかりとして、環境問題という領域に含まれるこの翻訳借用に端を発する「やさしい」の新しい用法をとりあげた。新語「地球にやさしい」、「環境にやさしい」のような翻訳語は、形式的等価 (Formal Equivalence) が求められる翻訳で、既存の日本語で造語されているにも関わらず、意味の曖昧さ、不明瞭さがあり、具体的な意味の分かりにくさが生じる。記事中に一般によく知られていない新語が現れる時、その文脈において何らかの言い替えにより意味が説明されるが「環境にやさしい」に固定した言い替えは見られない。それは、「環境にやさしい」の主体が物、商品のような具体物から、表2にみられたように抽象的概念に拡大使用されてきていること、「環境」はどの範囲の対象を指しているのか明確ではないということも、この新語の意味の分かりにくさの要因である。

「2. 1」の言い替えの調査から新語「環境にやさしい」のような用法において、「やさしい」は「敵対しない、害を与えない」を指していることが分かった。他にも「ユーザーにやさしくない」なども同様の用法である。「やさしい」は日本語の従来の意味範囲を拡張し、“friendly”のもつ対象への対等の関係という意識は意識化されないが、「敵対しない、害を与えない」という意味も含ませるようになった。これをナイダの図式を参考に整理すると次のように考えられる。

図2 friendlyの日本文化における変容



cultural contexts : 文章上の文脈も含めてことばの意味をつくっている社会的背景(E:欧米, J:日本)

\boxed{M} = 根底に対象への対等の関係は内在している「敵対しない, 害を与えない」

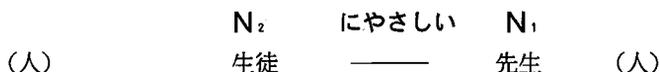
$\bigcirc M$ = 根底に対象への対等の関係は内在しない「敵対しない, 害を与えない」

$\bigcirc m$ = 古くからの思いやりを代表とする「やさしい」

message:friendly \boxed{M} の導入を契機として、「やさしい」は $\bigcirc m + \bigcirc M$ となる。

このように、外来の新語が導入される際におこることは、既成の世界に対して、新しい捉え方が提供されるということである。その新しい捉え方は、外来にある概念そのものではなく、自らの文化の反映する枠組みの基層 (substratum) に染められた捉え方である。ここに採り上げた翻訳借用による新語は、西洋の言語体系に位置付けられていることばを切り取って日本という異なる文化体系の中に取り込み、ひいては自らの従来の用法をも変化させ、私たちの言語共同体に帰化せしめたということである。

新語「地球にやさしい」、「環境にやさしい」が導入されることにより、既存の語の用法に新たな用法が生まれた。従来、「 N_2 にやさしい N_1 」は、「生徒にやさしい先生」などのように、 N_1 (主体)、 N_2 (対象) とも人と人との関係について使用されてきた。そして N_1 と N_2 は対等で共存・協調関係にあるというより、優位にある者 N_1 の劣位にある者 N_2 に対する気持ちや態度を表すために使用されてきた。しかし、「地球にやさしい」、「環境にやさしい」の導入を契機として、「赤ちゃんにやさしい病院」、「人にやさしい政治」のように、 N_1 が人為的な抽象的概念や無生物をとる用法が出現してきた。これは、従来 N_1 に人間をとる「やさしい」の「語彙素性」が変更されたということである。また N_2 も「身体にやさしい食品」、「胃にやさしいCDブック」のように、人以外にも人に属する身体や胃など、それと包摂関係にある語彙をとるようになり、 N_2 に人をとる語彙選択も変更をみたということである。このように、従来、人と人との関係で使用されてきた「やさしい」が人と事物との関係で使用されたり、あるいは人の下位語と事物との関係で使用されるということは、新しいものの捉え方を示唆している。これを図式化すると次のとおりである。



(生き物とみたてた) 地球	——	暮らし	(事)
(生き物とみたてた) 環境	——	建物	(物)
(人) 赤ちゃん	——	病院	(物)
(人に属する器官) 胃	——	CDブック	(物)

また、N₂(対象)に人間そのものではないが、人に属する身体、胃、肌、皮膚や、人がもつストレスなどの語彙が用いられることから、当該の表現は、地球や環境を生き物と同じように捉える視点を含んで使用されていると考えられる。見方をかえると、地球や環境を生き物と捉える視点が、既存の「……にやさしい——」の用法を拡張させていると考えられる。地球や環境に対してそれを人間や生き物でもあるかのように見立てる理由は、人と環境が、共存・協調関係をとらないと、共倒れするという深刻な状況に追い込まれていることにある。ここに、N₁とN₂は対等で共存・協調関係を含意する“freundlich”が用いられ、複合語“umweltfreundlich”がつくられた理由が示唆される。

更に言及すると、この対等な共存・協調関係を示すぴったりとした翻訳語が日本語に無かったということは、私たちの文化に、他者と自分との間の差異を認めあった上で他者と対等の関係を結ぶという関係性が希薄であることを示唆している。つまり日本文化が思いやり文化と称されるように、自分と他者が異なっているということよりも、他者に和合し同調させるような関係性をとりやすい文化の中で、“freundlich”、“friendly”にあたる適当なことばがなく、「やさしい」を翻訳語にあてざるをえなかったということである。しかし、この新語をつくるにあたって、外来語としてカタカナ使用の音訳をとらなかった理由は、この新語の提示に関わった当事者によれば、環境問題に対してできるだけ多くの人、子どもから老人までに関心を持ってもらうために分かりやすいことばを用いたかったということである。

また、この新語は社会の環境危機の解決のために、人々に新鮮な感じを印象づけ、魅力的で注目を集めるものでなければならなかったという事情が反映されていると考えられる。本稿でとりあげた「地球にやさしい」、「環境にやさしい」は、地球や環境を具体的で生命をもった人間にみてる表現(擬人法)であり、生命体と地球環境が一体性をもって結ばれているというガイア理論(J. ラヴロック, 1989)を想わせる。この表現(擬人法)により、メッセージの受け手に、目立った印象を与え、地球や環境と人との関係をより近いものに

する効果を与えたと考えられる。そして「やさしい」のもっている言語共同体のプラスの価値観がその使用を促し、ひいては地球や環境以外においても、違和感がありながらも新鮮な印象を与えたことが、その用法を促進したと考えられる。この新語の用法「…にやさしい」の現況（97年8月）をインターネットのホームページのタイトルや文章に探ると、最近のものを一覧しただけでさえ、地球や環境を対象にとる用法は、当然の如く使用されていることが分かる。また、地球や環境以外に、人の下位語を対象にとり、主体に事物をとる「やさしい」の用法「血流にやさしい食事」、「胃にやさしい生活」、「人にやさしい医療」、「人にやさしい地下鉄」などが次々に目にとびこみ、この新語の用法の社会への定着が窺える。表2において、新語の「やさしい」の主体は、対象を損なう可能性のあるあらゆる事物をとることが示されていたことから、これらの例も、現代の生活がいかに人に厳しいかを逆説的に示している。すなわち、地球や環境がいかに損なわれているかばかりではなく、「胃を損なう生活」であったり、やさしいはずの医療を敢えて「やさしい」と言わねばならぬ程やさしくないことを表している。このように、新語は、社会のありようを如実に映し出す鏡としての機能をもつことが明確に分かる。

〔注〕

- (1) 例：既存のシダ類の「ぜんまい」を形の類似から、新しい意味として、ばねの「ゼンマイ」とする。
- (2) 例：既存の語「歯」と「車」を組み合わせて新しい別の語「歯車」をつくる。
- (3) 例：automobileを「自動車」とする。
- (4) 例：ice creamを「アイスクリーム」とする。
- (5) 新しい事物・概念を導入する時、それを表現するために外国語の語句の要素を字義どおり一つ一つ翻訳して新しい語句を生み出す方法。
例：white paperを「白書」とする。
- (6) 環境庁および日本環境協会理事の橋爪氏への筆者によるインタビュー調査から得た。
- (7) 「配慮」：金田一京助 他編『新明解国語辞典』（1994年、三省堂）による。
- (8) Das große Wörterbuch der deutschen Sprache DUDEN Band 3 (1993)
- (9) Das große Wörterbuch der deutschen Sprache DUDEN Band

7 (1995)

- (10) (『三省堂国語辞典』第三版 一九八二年, 1994第四版一九九二年, 『岩波国語辞典』第三版 一九七九年, 第四版一九八六年, 第五版一九九四年『辞林21』一九九三年)
- (11) 『大辞林』第2版 (1995年), 『大辞泉』第1版 (1995年)
- (12) ゴシック部分の記述は意味が分かりにくいいため, 当辞典の編集室へ照会したところ, 編集室もこの分かり難さを了解し, これについて編者に伝え検討するとのことであった。

参考文献

- (1) O.イエスペルセン(原著 1922) (三宅鴻訳)『言語—その本質・発達・起源』上巻, (岩波書店, 1981年)
- (2) 鈴木孝夫『ことばと文化』(岩波書店, 1973年)
- (3) 池上嘉彦『意味論』(大修館書店, 1975年)
- (4) 田中克彦『言語の思想』(岩波書店, 1975年)
- (5) 柳父章『翻訳とはなにか』(法政大学出版局, 1976年)
- (6) ユージン A. ナイダ (升川潔 他訳)『意味の構造-成分分析』(研究社, 1977年)
- (7) Lyons, J. (1977). *Semantics* 1, 2 :Cambridge University Press.
- (8) 柳父章『翻訳語成立事情』(岩波書店, 1982年)
- (9) Lovelock, J (スワミ・ブレム・プラブダ訳)『ガイアの時代』(工作舎, 1989年)
- (10) 宮本憲一『環境経済学』(岩波書店, 1989年)
- (11) Frawley, W. (1992). *Linguistic Semantics* : Lawrence Erlbaum Associates, publishers
- (12) 池上嘉彦, 山中桂一, 唐須教光『文化記号論』(講談社, 1995年)
- (13) 平林あゆ子「新語の生成と意味変容について—環境問題に関する新語の分析と考察—」(一橋研究 第21巻 第3号, 1996年)

謝辞

本稿をまとめるにあたって, 貴重なコメントを頂きました田中克彦先生, 湊博昭先生, 日本環境協会の橋爪繁幸氏に深謝致します。